巻頭インタビュー

山下泰裕

平昌オリンピック日本代表選手団副団長
日本オリンピック委員会常務理事・選手強化本部長

やました　やすひろ
1957年生まれ。中学時代から柔道選手として頭角を現し、77年東海大学2年のときに全日本選手権に最年少優勝。以後、引退する85年まで9連覇。84年ロサンゼルス・オリンピック無差別級優勝。引退後は後進の指導に携わりながら、柔道界のみならず多方面で活躍。現在、母校東海大学の教授・副学長、全日本柔道連盟会長、味の素ナショナルトレーニングセンター長などを務める。2017年より日本オリンピック委員会常務理事・選手強化本部長として選手強化の陣頭指揮にあたる。

平昌から東京へ 勝負を超えた感動を伝える

聞き手・布施鋼治

――平昌オリンピック日本代表選手団副団長として、平昌に入られました。

山下　私は、オリンピックといえば夏季大会ばかりで、冬季オリンピックには初めて参加しました。開会式でスタジアムを回っているときは不思議と寒さを感じませんでしたが、その後用意されたスタンド席に座ってからは、寒かったですね。

――現地の様子はいかがでしたか？

山下　スキーなど屋外競技が行われた平昌と、スケートなど氷上競技会場が集まる江陵と二都市に分かれて開催されましたが、いずれでも温かいもてなしを受けました。私は選手村に寝泊まりしましたが、現地スタッフの方はいつも「おはようございます」「お疲れさまです」と日本語で挨拶してくれました。また、会場では日本語に堪能なボランティアの方がついてくれて、大いに助けられました。東京へのオリンピック誘致が成功したきっかけの一つとして、滝川クリステルさんの「おもてなし」スピーチが話題になりましたが、平昌ではまさにそのおもてなし精神を感じました。

目標を上回る日本人選手の活躍

――日本代表選手団は金四、銀五、銅四と、過去最多となる一三個のメダルを獲得しました。

山下　出発前は複数の金メダルを含む計九個以上のメダルが目標だったので、選手たちは本当によく頑張ってくれました。

――多くのドラマも生まれました。

山下　すべてを現地で見たわけではありませんが、感動的な場面がいくつもありました。まず挙げたいのは、スピードスケート女子五〇〇メートルで小平奈緒選手が勝利した後、準優勝となった韓国の李相花選手と手を取り合って健闘をたたえ合ったシーンです。

――その際、小平選手は李選手の肩を抱き寄せて、韓国

平昌冬季オリンピック閉会式のパレードで観客に手を振る山下氏（AFP ／アフロ）

女子チームパシュート決勝戦。阿吽の呼吸で見事に金メダルを獲得した（AFP ／アフロ）

語で「チャレッソ（よくやった）」と労（ねぎら）ったと聞きました。

山下　二人はライバルでありながら、お互いを尊敬し合い、交流もあったようです。聞いたところでは、三年前にソウルで行われたワールドカップで小平選手が初優勝したとき、すぐにオランダに戻らなくてはならなかったのを、李選手がリンクに空港行きのタクシーを呼んでくれたこともあったそうです。お互い、国を背負いながらしのぎを削ってきた真のライバル同士だからこそ、理解し合える部分があったのでしょう。自分の現役時代を思い出しました。

――一九八四年、ロサンゼルス大会での山下さんとラシュワン選手の姿が重なります。

山下　スポーツにとって勝ち負けはもちろん大事ですが、それを超えた価値、例えば、相手に対する尊敬や友情、相互理解のような要素が確かにあるのです。見ている人たちも、それを感じられるから感動する。

　相手を称える気持ち。これは、少し大げさにいえば、世界平和の精神そのものでもあります。小平選手、李選手の姿からスポーツが持つ可能性を感じられたことは、素晴らしかったと思います。

――ほかに印象に残ったシーンはありますか。

山下　直前の大けがを克服した羽生選手の集中力には脱帽しましたし、ノルディック複合の渡部暁斗選手が肋骨の骨折にもかかわらず走り抜いた姿にも感動しました。競技中は痛みを忘れていたかもしれませんが、普通であればストックを動かすだけで激痛が走ると思います。金銀銅三色のメダルを獲得した高木美帆選手は、八年前のバンクーバー大会に中学三年生で代表に選出された逸材ですが、ソチでは一転して選ばれなかった。そこから這い上がっての金メダルには、多くの人が勇気づけられたでしょう。それに姉妹で出場したパシュートもすごかったですね。

――見事なチームプレーを披露して、金メダルを獲得しました。

山下　あれこそ日本人らしい勝利でした。出場選手のタイムを単純に足し算すれば、オランダチームの方がはるかに優位なのに、勝ったのは日本。二〇一六年夏季のリオ大会で見た男子4×一〇〇メートルリレーのバトンパスを思い出しました。

強化責任者が見据える東京

――さて、次はいよいよ二〇二〇年の東京大会です。

山下　頭の中は、どうすれば東京大会において日本代表選手たちが最高のパフォーマンスを発揮できるかでいっぱい

です。東京でのオリンピック開催はおよそ五〇年ぶりなので、それに携わることは、非常に名誉なことです。東京オリンピック・パラリンピックが閉幕したら、そのときはもう亡骸になっていてもいいくらい、全身全霊をかけ取り組む覚悟です。国民の皆様の心に火をつけ、オリンピックのムーブメントに巻き込んでいくにはどうしたらいいのか。ＪＯＣの執行部に入った時からずっと、そのことを考え続けています。

――強化責任者として、どのような展望をお持ちですか。

山下　近年の夏季オリンピックで日本選手の活躍が目立つようになったと思いませんか。直近のリオデジャネイロ大会では、史上最多となる四一個のメダルを獲得しています。躍進の原動力は味の素ナショナルトレーニングセンター（ＮＴＣ）です。二〇〇八年にＮＴＣが設立されたことで練習環境が格段によくなりました。それまでは、各競技、あるいは各個人で練習場所を確保しなければならず、時には練習場所を求めて転々とするような状況がありました。それを克服し、集中的に練習できる環境をつくったのがＮＴＣです。また、レスリング、卓球、フェンシングなど一部の競技は、ＪＯＣエリートアカデミーに参加し、ジュニア時代からのアスリート養成に務めています。

――今秋にはＮＴＣに隣接した新しいトレーニングセンターが完成する予定です。

山下　ＮＴＣはオリンピック・パラリンピック双方の選手強化に関わります。これまでのＮＴＣはオリンピック競技用でしたが、新センターではパラリンピック競技用の設備も加え、オリンピック・パラリンピック双方の選手が利用できる施設になります。

ひとつ悩みがあるのは、冬季競技です。今回、選手団副団長として平昌に参加してわかったのは、日本の冬季競技の練習環境は、米国や北欧はもちろん、隣国の中国や韓国と比べても恵まれた状況にはないということです。二〇二二年の北京オリンピックに向け、練習環境の整備は不可欠だと思い、冬季競技版ＮＴＣの開設を目指して、現地に視察にいらしていた関係者の方々にお願いしました。

日本を大切にするから、国際交流ができる

――平昌大会の話に戻ります。女子アイスホッケーで韓国・北朝鮮の統一チームが結成され、話題になりました。

山下　今大会を象徴する出来事の一つですね。日本のメディアでは賛否両論、どちらかというとネガティブな意見が多かったように感じました。しかし、私はポジティブに

捉えています。韓国と北朝鮮は同じ民族ですから、我々が容易には理解できないような精神的なつながり、深い感情があると思います。当初は参加が危ぶまれていた北朝鮮が参加したのも基本的にはよいことですし、その過程ではいろいろな混乱もあったにせよ、世の中、何事も計画通りに動くわけではありません。流動的な政治情勢のなか、限られた時間の中で、むしろよく準備できたと思います。

競技別に専用練習場を備える味の素ナショナルトレーニングセンター。代表選手強化に果たす役割は大きい（YUTAKA ／アフロスポーツ）

少し脱線しますが、日本人の感覚や感情が通用しない国や地域は、いくらでもあります。むしろ通用する場所の方が少ないかもしれません。しかし、そこに違いがあるから、国際交流の意味があるのです。自分でいうのもなんですが、国際交流においては日本スポーツ界の中でも指折りと自負しています。全日本柔道連盟や私が理事長を務めるＮＰＯを通じてロシアと交流し、南京と青島には日中友好柔道館を設立しました。イスラエル・パレスチナとも交流し、発展途上国にも何度も出かけています。

――なぜ国際交流に関心を持つのですか。

山下　柔道家として「柔の道」を世界中の人に知ってほしいからです。柔道に育てられた者として、日本の良き伝統、美徳を世界中に伝えたい。何も相手に押しつけるわけではありません。柔道を通じて自然と体得できます。また、日本の伝統に誇りがあるから、相手国の伝統にも敬意を払います。日本人を強く意識することと、国際人であることは、別に矛盾しません。そこに国際交流の面白さがあるような気がします。●